

東日本大震災における社会福祉協議会課題検証座談会

日時 平成 26 年 6 月 14 日 (土) 9 時～ 11 時 50 分

会場 大槌町社会福祉協議会 仮設事務所会議室

出席者 () 内は、震災時の役職名

| | |
|-------------------------------------|---|
| 会長 (副会長) | ■ |
| 総務課長 (総務課総務係長) | ■ |
| 業務課長 (業務課長兼居宅介護支援事業所管理者) | ■ |
| ワークフォローおおつち所長 (同副所長) | ■ |
| 業務課長補佐兼小規模多機能型居宅介護事業所管理者 (ほっと大町管理者) | ■ |
| デイサービスセンターはまぎく管理者 (居宅介護支援事業所主任) | ■ |
| 訪問介護事業所管理者 (同サービス提供責任者) | ■ |
| 総務課総務係長 (総務課主事) | ■ |
| 居宅介護支援事業所ケアマネジャー (同、震災後、生活支援相談員) | ■ |
| 総務課地域福祉係主事ボランティアセンター担当 (ほっと大町介護職員) | ■ |
| ●司 会：事務局長 (大槌町議会事務局長) | ■ |
| ●記録係：生活支援相談員 | ■ |
| 総務課地域福祉係長 | ■ |

■ 本日は貴重な時間を割いてご出席いただき、ありがとうございます。平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で、大槌町は甚大な被害を受けました。大槌町社協でも貴重な人材や財産を失い大変な状況だったと思います。二度と同じ惨事を繰り返さないために、東日本大震災における大槌町社協の職員の対応や行動を検証し、記録誌を残し、後世に伝えていくことが私たち職員の責務だと思っております。

本日は、皆さんが震災を通して得た教訓や課題を検証し、後世に伝えるために、「東日本大震災における社会福祉協議会課題検証座談会」を企画いたしました。

本日の座談会では、主に 4 つの点について皆様から伺いたいと思っております。

まず、一点目は災害発生直後の避難から避難生活を振り返ること、二点目、組織体制の振り返り、三点目、今後の災害の備えを考える、四点目、多くの支援への感謝の思いや伝えたいこと、4 つの点についてお話を伺いたいと思います。

まず一点目の地震発生時の避難から避難生活を振り返るということで職員の動きに関すること、社協事務局から避難に向けた職員の動きについて、■ 総務課長からお話をお願いします。

【災害発生時、直後の避難から避難生活を振り返る】

《職員について》

■ 私は、11日は事務所の 2 階におりました。1 階では、パソコンの入れ替え作業を行っており、業者が来ておりました。ケアマネジャーは、釜石で研修会があり、また、当時の事務局長も会議出席のため釜石に行っていました。2 階には総務課長と私と■ がありました。地震があつて、それこそ動けませんでした。事務所の避難口のドアを開けるのが精一杯で、何かにしがみついていた。それから、マニュアルでは、「ほっと大町」※1 の利用者を「デイサービス」※2 に避難させるということでしたので、ま

ずそれが先だと思い、3人とも外に出て「ほっと大町」の様子を見に行きました。

その時記憶にあるのは、すぐ停電になったんですけども、1本だけ電話がつながりました。ヘルパーの利用者さんだと思いました。「今、盛岡からですけど、うちの母は大丈夫でしょうか、今日ヘルパーさんが行っていると思うのですが・・・」という内容でした。「多分、大丈夫だと思います・・・今、様子を見ています」と返事をした。名前はお互い慌てていて名乗らなかったのが、利用者が誰かは分からなかった。ただ、そういう電話が1本だけ地震直後にありました。それが記憶にあります。

まずは、「ほっと大町」の利用者を「デイサービス」に避難させなきゃいけないということで、事務所にある車で「ほっと大町」の利用者を手分けして避難させました。

■ その時は津波が来るとは思わなかった。

■ 職員は津波が来るとは思っていなかった。後から戻ることがあっても、「デイサービス」に向かわせました。

■ 私は津波があそこまで来ると思わず、また戻って来ると思いながら「デイサービス」に避難しました。役場の職員が、ところどころに立っていました。

■ 最後まで残っていたのは事務局長と総務課長と訪問介護事業所管理者と私と・・・もう一人、パソコン入れ替え業者の方だったと思う。

2階のパソコンの部品交換にもう一人業者が来ていた。2階の状態は、物が落ち、作業ができる状態ではなく、「この地震で津波が来るかもしれないので次の機会にしましょう」と帰るようにと言い、帰した。

その時には津波が来ると思わず、天気がいいねえ、地震は凄かったねえ、とのんびりと話をしていたような気がします。

■ 津波が来たことがないので、分からなかった。

■ 私も津波が来るとは思わず、役場の前に立っていたのを記憶しています。皆、同じような感覚だったのではないのでしょうか。

■ 誰も津波が来るとは思っていなかった。

■ 震災から4年目に入って記憶も薄れてきている部分もあるし、思い出したくない方もいると思いますが、話せる範囲でお願いします。

■ 順番的にはどうだったか。利用者に乗せた職員は当然「デイサービス」に行っている。会社の車もできるだけ「デイサービス」に持っていく。運んだ職員も「デイサービス」に行っている。残っていた職員はどうするか。私は、総務課長から「取りあえずデイサービスに行け、後から行くから」と言われ「デイサービス」に移動した。その時点では、釜石に行っていた職員はまだ戻っていなかった。

■ 釜石にいたのですか？

■ 釜石に行っていて、私たちが帰った時は、事務局長、総務課長、訪問介護事業所管理者、業者の4人だけがいた。業者の方には、早く帰った方がよいと言い、業者が車に乗るところだった。

■ 残っていたのはその4人。

■ 駐車場の角の電柱の所から水が湧いてきていた。いつもと違うよね、と言いながらも、その当時は危機感がなかった。

《利用者について》

■ 次に進みます。利用者についてですけども、「ワークフォローおおつち」※3の避

難に向けた対応について 〇〇所長からお願いします。震災前からマニュアルはあったと思うんですけど、マニュアルどおりにいったのでしょうか？

〇〇 震災当時、その日はわかめの加工作業があったが、わかめの量が少なく、1時半か2時前には利用者は帰っていて、利用者1人だけが作業の後片づけをしていた。(職場のある)安渡地区の方でしたが、あの地震で津波が来ると思ったので、家に帰した。

マニュアルは、一旦堤防に上がって国道45号線沿いに大徳院(避難場所)の方に逃げるという想定でしたが、利用者が1人だったのでそのまま帰しました。その方は避難し、無事でした。その他の方も自宅に帰っていたので、それぞれ個人的に無事に避難しておりました。1人は逃げ遅れて津波に巻き込まれ、怪我をし、今は杖を使用する状態になっていますが。

利用者を帰し、事務所には私1人だけだったので、利用者に対してのことは、あとは何もなかった。神棚のものが落ちたりしていたが、パソコンにはデータが入っていたので、それだけ持って逃げました。そのあとは、自宅避難のことはした・・・そこまででした。

〇〇 分かりました。次に、「ほっと大町」の利用者の対応について、〇〇さんからお願いします。マニュアル等についてもお話し願います。

〇〇 あの当時、「ほっと大町」は利用者が9名いました。管理者が休みのため不在だったので、地震が続く中、利用者を外に出せ、と叫んだ。その後、外には総務課の職員もいたので、手分けして利用者を車に乗せた。利用者を最優先に避難させることができましたと思っています。その後、「ほっと大町」の職員も避難した。私は、逃げ遅れた方がいないか確認をし、施設内の異常がないか見て回りました。その時は、戻ってくるものと思いながら玄関の鍵を掛けた。家族が訪ねてくる場合も考え、利用者は全員「デイサービス」に行っているとはり紙をした。マニュアルの細かいところまでは、頭の中が真っ白の状態でしたので、活用されたかどうかは分かりませんが、利用者を避難させることはできた。

その日は、ケアマネジャーの研修があり、「ほっと大町」の送迎車を使用していたので他の車両で避難させましたが、スムーズに避難させることができました。

〇〇 マニュアルがあって活かされたんじゃないかと思います。一瞬の判断が生死を左右するわけで、個人にかかる負担が大きかったのではないかと思います。

〇〇 次に進みたいと思います。震災直後、「ケアプラザ」※4に避難し、数日後「デイサービス」に戻ってきたと聞いておりますが、利用者への対応について、〇〇課長よりお願いします。

〇〇 利用者が一緒にいたので、利用者を介護しなければならない。ただただ、それだけでした。

職員の中には、避難所に(利用者の)家族がいるので、家族を探して利用者を早く家族のもとに帰せと言う職員もいましたが、トイレ介助やおむつ交換が必要な利用者、また、認知症の利用者を一般の避難所へ帰すことは、避難している住民の中で家族が介護するということになるので、無理だと思った。

利用者を最優先することを考えて、対応したのですが・・・

聞いた話では、「デイサービス」のエアコンが震災で落ち、ここでは避難はできない、ということで、「ケアプラザ」に行った。避難所で役立つようなものは全て運んだ。

しかし、「デイサービス」にいた方が便利であった。「デイサービス」に避難できるとよかったが・・・。

その時は「ケアプラザ」に行った方がよいと思った。しかし、環境が悪かった。廊下に利用者を寝かせた。床の上などに。布団もなかった。

利用者は町の津波を見ていないため、すぐに帰れると思っていたと思う。町がどんな状態になっているか、全く分からない。ただただ、余震などで混乱していた。

一回は「ケアプラザ」に行ったとしても、やっぱりもっと早い段階で「デイサービス」に戻ってくれば良かった。

戻ってきたのは1週間目だった。

介護するのが精一杯で、それ以外のことは考えられなかった。「ケアプラザ」にいた1週間が一番大変だった。

16日に移動することを決めた。まず、「デイサービス」の施設内を片づけることを優先し、掃除部隊を編成した。掃除をしに行った。エアコンが二つとも落ちており、天井もはがれ落ちていた。しかし、畳の場所もあるし、こっちの方がよいということになった。

心配だったのは、水がなかったことであつたが、100メートルほどのところに井戸があるということで、16日に移動を決め、17日に掃除をし、18日に引っ越しをした。

職員は分散になっていた？「デイサービス」には、何人くらい職員はいたのか？

分散にはなっていない。

利用者24人、職員24人、同じ人数だったことを覚えている。

君は、その日の夜はいたが、翌日に帰った。私は、(震災の)次の日「ケアプラザ」に行った。

翌日、男性職員2名は消防団に所属していることもあり、「俺行くからよ・・・」と消防団に行った。「ほっと大町」等の非常勤の職員については、13日に帰した。妊娠初期の職員がつわりで具合を悪くしていたので、帰した。24人中、6、7人帰った。残った職員を2班に分けて介護した。介護だけではなく、「ケアプラザ」で食事の用意、おにぎり作りなど、他のこともしなければならなかった。

ご飯をもらうために、おにぎり作りをした。

「ケアプラザ」ではお米が足りなかったから、実家が農家の社協職員がお米を調達するように頼まれた。その職員は、自分の家だけでは用意ができないので、北上にいる姉に連絡を取り、お米を調達してもらうように要請した。姉は、北上市役所にお問い合わせに行き、送ってもらった。

その間、利用者の家族が迎えに来たり、家族と一緒に帰ったり、合流したりして利用者は減ったが、利用者が減った分、「ケアプラザ」の入所者や一般避難者の中の高齢者で、トイレ介助、オムツ交換、配膳などが必要な方々のお世話をすることになり、職員は本当に大変だった。

《指揮命令系統について》

話が重複したり、前後する部分もあるが、次に指揮命令系統について、震災の混乱の中、社協幹部との連絡が取れない、そういう状況の中での職員の対応ということに

ついて、 総務課長よりお願いします。

 事務局長が行方不明になるということを正直考えてもいなかった。後から「デイサービス」に来るだろうと思っていた。「デイサービス」には、「ケアプラザ」に行っています、というはり紙をした・・気がした。

 私が「デイサービス」に行ったときは、はり紙がなかった、 さんと会って、分かった。

 既に「ケアプラザ」に行っていた、ということですね。

 記憶が曖昧なので、定かでない部分もありますので・・

 事務局長、総務課長が亡くなっていたと思わなかったでしょうから・・

 「デイサービス」に職員が1人残っていたような気がします。明日はどうだろうね・・、いずれ「デイサービス」で生活することの覚悟も必要になるかもしれない、という話をした記憶はある。

次の日、 さんが来てから・・消息を尋ねて来た方の中に、 副会長がいて、会長、()副会長の所在などを尋ねた。 副会長が避難所になっている大槌高校にいと聞いた。

事務局長の奥さんが事務局長の所在を尋ねてきたことで、初めて行方不明になっていることを知った。

 社協職員が「ケアプラザ」にいと聞いて訪ねてきたということだった。

 12、13日頃か・・情報が分かったら教えてください、と言われた。 事務局長もいないということになれば大変だということで、 副会長がいる避難先の大槌高校に行ってみるか、ということで、 課長と2人で行った。

 2人の顔を見て社協のことを思い出した。それまでは自分のことだけで、社協のことを考える余裕はなかった。釜石に行っている娘も連絡が取れず、妻と2人避難していたが・・社協に何かあったと思い(皆と)合流した。正直、社協のことを考える余裕はなかった・・妻は避難所に残し、別居生活になった。

 さんと会って、 副会長、 副会長の所在が分かり、指揮命令系統が保てる状態になった、ということですね。

同じ質問で、「ワークフォロー」の さんからお願いします。

 私は当時、安渡作業所で副所長の立場でいた。自分のところの利用者を帰して、自分も大槌高校に避難した。「ワークフォロー」の本家本元は、赤浜の事業所で、当時、 さんが所長をしていた。

 指揮命令系統ということでは、皆、避難したからよいと思った。

赤浜の事業所は、津波は大丈夫でしたが、(津波)火災がありそばまで火が迫って来たことから、これでは駄目ということで、パソコンを積み、利用者に乗せ、利用者を自宅や親御さんのもとに帰すため国道を沢山地区まで行った。11日のことです。それ以上通行ができず、皆を避難所となっている吉祥寺に連れて行った。そこに、3、4日泊まった。

その後、利用者の親御さんが何人かは引き取りに来た。しかし、4人ぐらいが残ったようである。

(赤浜の利用者は)精神障害者で、薬が手に入らないために体調を崩す方もいた。周囲に迷惑もかかり、避難所の責任者から、出ていくように言われたことから、出さ

るを得なかった。あとは、近くの、大ケ口地区などの避難所に移った。

この間赤浜の事業所と安渡との間の連絡のやり取りはなく、私は利用者を帰したので、それだけでよいと思って…自分のことしか頭になかった。

指揮命令系統のことまで頭になく、利用者を帰すことで安心した。自分のこともあったので、社協のことまで頭は回らなかった。

赤浜は 所長が、安渡は さんがそれぞれ対応したが、当時は、連絡を取り合えなかった状況であったということですね。分かりました。

利用者の介護をすることは分かるが、職員であることと同時に避難者・被災者でもある。私は、どこまで利用者の介護等のことをしていくのか分からなかった。自分は帰ったが、本当はやらなきゃいけないかもしれないけど、その指揮系統で妊婦、子供のいる人は帰っていいよと言われた。やれる状態でなかった。

このような座談会を踏まえて、それなりのマニュアルを作らなければならない。個人的に勝手な行動をされては組織として成り立たない。

今回の経験を踏まえてマニュアル作りをしていかないといけない。

そのとおり。実際、被災者なので家がどうなっているのか、家族がどうなっているのか、親戚がどうなっているのか分からず、不安を抱える状況の中ではあるが、目の前に利用者があるのであればその人たちのことを守らなければならない。今回、そのところで職員もすごく大変だったわけですが、やっぱりやらなければいけないことはやらなければいけないと思う。帰せばいいっていうものでもない。避難所に適応できる人とできない人が当然いるわけだから、そこは見極めることが必要になる。

あの段階で、指揮する管理者がいたとしても、情報が全然ない中では的確な指揮ができなかったと思う。利用者で動けない人、やらなければならない人に皆でお世話をしている。職員の中には、夫、両親、家を流されても、黙々と介護にあたっている人もいた。

今まで自覚がなかったのだけれども、社協は介護保険がメインのところだと思っていた。社協がどんなことをするべきところか分からなかった。老人クラブと赤い羽根、共同募金、民生委員と介護保険のことをやっていると思っていた。

利用者に対しても、残っていれば介護をしなければならない仕事をしている。今回初めて、社協の大きな役割が分かった。

やらざるを得ない。

そこは一般の避難者とは違う。

せっかく、施設から避難させ、無事に逃げた人を置いたまま帰るわけにはいかない。

立場はそれぞれ違うのだけれども、私もそういう経験をしてきたが、屋上に逃げて一晩過ごしてからヘリコプターで救助され、野球場に降り、その後、(役場の職員として)対策本部を立ち上げた。家族と連絡も取れない状況で、遺体が次から次と上がってきて、やらなければならないことが多く、そのことに没頭して家族のことを忘れてしまう。夜、寝る前にぼっ・っと思ひ出す。

やっぱり、指揮命令系統のマニュアル作りが必要になってくると思う。

《利用者や職員の安否確認について》

次に利用者、職員の安否確認について、重複になりますが 課長からお願いします。

今回の場合、すぐ安否確認をしなければならないという気持ちはなかった。目の前
のことだけで精一杯だった。ただ、情報として、家族が捜しに来れば、ああそうなん
だ・・・という感じでした。

職員が「ケアプラザ」に来て、ああ大丈夫だったんだ、と思った一方、津波を見て
いないから、被害がどのくらいのもので、職員が何で来ないのか、何日も来ないのは
駄目、という状態が分らない。

こっちから、積極的に職員と連絡を取るにも電話がつながらず、車のガソリンもな
く、そもそもどこに行けばよいかも分からず、できなかった。

事務局長、総務課長、訪問介護事業所管理者が亡くなった。

訪問介護事業所管理者の家族が「ケアプラザ」に来た。最後一緒だった・・・

生きていれば「デイサービス」に来るのだけれど・・・。

さんからもお願いします。

自分が職員の安否確認に出かけることもできなかったから、誰かが来た時に、登録
の（ホームヘルパー）誰々がいた、というような外からの情報で大丈夫だったんだな
あということを確認できた。

ヘルパー1人だけが訪問中に地震に遭った。次の訪問先である海沿いの利用者宅に
向かっている途中で車ごと流された。運よく、郵便局の倉庫の屋根に引っかかり、若
い郵便局員に引き上げてもらって助かった。低体温になり、怪我をし、泥水をのんで
いた状態であった。

自分の場合だったらどうしたのかなあ、と考える。後で、本人に「何で海沿いの利
用者宅に向かったのよ！」と言ってしまったが、彼女はまじめな性格だから・・・。

誰も経験がないから、津波が来た時に、明確なはっきりしたマニュアルがなかった。
あったとしても職員に周知されていなかった。マニュアルを作るときに一人ひとり周
知することも今後の課題だ。

ヘルパーの場合、津波警報が出た時に「デイサービス」に逃げるとか・・・マニユア
ルはなかったのか？

簡単に言えば、「デイサービス」に逃げる。

移動中であれば近くの避難所に逃げる、というのがあった。

マニュアル作成委員会で作ったので、常勤職員はマニュアルを知っていたが、登録
のヘルパーさん一人ひとりまでは周知が不足していた。

ひととおり説明し、一人ひとりに配って、だけど周知は足りなかった。

送迎中に地震があったらどうする、というのがあったような気がするが・・・

防災無線で注意報であったら様子を見る、津波警報であれば避難所に移動、安全な
場所に移るという内容だった。

マニュアルは全部の事業所の分も様式を揃えて作っていたが、いざとなればなかな
か思い出せない。

【組織体制を振り返る】

《組織体制、職員態勢を振り返る》

訓練が必要になってくると思われる。次に、二点目の組織体制を振り返るという項

目に移っていきます。組織体制、職員態勢を振り返るということで、行政や県社協、また全社協との連携について 会長の話伺います。

最初の頃は、社協そのものも、役場自体も組織が動かない状態だったから、どうにもならなかった。ある程度形ができてきてからは、行政との連携の面では、しょっちゅう役場に出向いて、いろいろな話、相談をしてきた。行政との連携は割合とうまくいったと思っている。様々な方、ボランティアで訪れる方があっても、(災害対策)本部長と直に会えて、直接話し、相談ができるなどうまく連携が取れたと思っている。県社協とは、自分は直接連絡をしなかったが、いつか県社協の職員がデイサービスに来たと聞いたが・・・。

17日に来た。「デイサービス」に移ったのが18日で、確か、その前日に「ケアプラザ」に訪ねて来ました。県社協から2人、先発隊として様子を見に・・・そこで、明日から「デイサービス」の方に私たちは移ることになったと話しをしました。それで、県社協では、「デイサービス」の方にも回ってみますということから、「デイサービス」に案内した記憶があります。その時に、何もない、事務所も何も流されて何もないと説明した。会長以下、事務局長、総務課長、訪問介護管理者が行方不明になっているという話をした記憶があります。

14日の日に、花巻市にいる息子が訪ねて来たので、花巻に帰ったら県社協に電話をするようにと話した。

県社協も、震災から1週間くらいで来た、ということになる。

ここで、資金面、職員の採用、退職について 課長からお話します。

私が震災前に聞いていたのは、採用は決めたいけれど、正職員は無理なので臨時職員で、一人だけ増やすということは聞いていた。

混乱している時に(デイサービスに)来た。今採用しても混乱してごちゃごちゃしているから、6カ月延ばしてもらおうよう本人と母親に話した。了解してもらい帰ったが、後で考え、6カ月後といってもその時もうどうなっているか分からない、同じ働くのであれば、一緒に苦労したほうがよいのじゃないかと考え直し、急ぎよ、2、3日後に連絡し、予定どおり4月1日から働いてもらうことにして採用を決めた。

資金があるのは分かっていた。基金を積み立てしていたので、1人くらいの採用はよい、と。後からの問題だけれども、職員について、基金があるので1年位は食いつなぐによいと思っていた。

会長の言うとおりの、資金的なことはあまり心配していなかった。通帳さえ再発行できれば何とかなる、と。会長と話をしたときに、介護保険事業で積み立てていた積立金をつぶして行って、「まごころ福祉資金」を潰すのは最後の最後だと思った。あれまで手をつけたら、社協はなくなるだけだ、と。何より心配だったのは、11日は3月支給の給与の支払い依頼書を銀行に持って行っていた日だった、午前中に。給与の支給が15日に振込になるのかどうか、分からなかった。私もデータを持って出せなかった。銀行印もない、通帳もない、データも何もない。県社協が来たときに、公印も何もないという話をしたら、岩手県社協が銀行印や公印を作って持って来てくれた。

それから、会長と一緒に銀行に行って、通帳の再発行の手続きだったり、振込の関係を聞くのに、朝行っても夕方までかかる状態でした。

銀行では日曜日にも相談窓口を設置していて、たまたま会長と銀行に行ったのが日曜日であったが、行員の中に■■支店の方はいないか訪ねていった。■■支店で定期預金の書き換えなどで社協に来ていた外回りの方で、顔見知りの方がいて、その方に通帳の再発行の手続き方法や必要なものを聞いて、あと銀行の振込はどうなっていましたかと聞いたら、11日に預かった依頼書は■■支店の金庫の中に入れてあるので、取り出せる状態ではなく、振込できない、(金庫を)開けない限りは何も手がつけられない、開けたとしても、火事があったのでデータは多分もう使えないものと思ってください、と言われたので、3月分の給与は振込ができなかったのだなあと思って。

■■ 自己申告で基本給(の金額)を書いてくれと言われて、書いた記憶がある。

■■ 計算方法が分からなかった・・2月と同額で、ということにした。

■■ 銀行のほうでも、3月の振込は口座番号も分からないので、職員の名前を書き出して2月の実振込額のデータをもらって、申し訳ないけど2月と同額を振り込ませてくれということにした。

通帳の再発行に関しては金融機関は手続きが厳格で、理事さんの、確か実印だか、依頼書だか持って来るように言われた。手続きするにはどうしたらよいか、と聞くと、誰か理事さんの保証の印鑑が要ると言われて、この大変な状況のときに他の理事に、はんこも皆さんない状態で、通帳再発行の保証の印鑑を理事からもらうというのは大変だったので、私は自宅が流されていなかったから、印鑑もあるし銀行振り込みの口座の届出もしているし、免許証とか保険証とか身分証明もあるので、私のはんこではどうか、と交渉した記憶があります。銀行では、私が経理などの担当の責任者をやっているからということで、支店の職員が判断して、それで確かオーケーをもらった記憶があります。

■■ たまたま■■支店長がいた。大槌の人に間違いないということで・・

■■ 確認できているからということで、社協の人だからということで・・それで、他の金融機関も同じような形で、会長と2人で行って、再発行してもらって・・

■■ 一日掛かりだった、あの頃は・・。皆、そうだった。

■■ 会長と相談して、31日までに職員の給料と、あと「ワークフォロー」の利用者の工賃、3月支給の工賃分の振り込みは何とか済ませたい、と思って、県社協からも銀行の本店経由でお願いしてもらって、給与振込の口座のデータを出してもらったりしながら進めてきた。

■■ 給料は根幹的なこと、生活していくためには必要なお金ということだから・・その辺は大変な苦勞をしたことと思います。

《事業所を再開するにあたって》

(利用者のニーズ把握)

■■ 次は、事業所の再開について、ということで、各事業所でどのように利用者のニーズの把握を行ったか。■■さんからお願いします。

■■ 当時、私はケアマネで、管理者は■■さんだった。震災当時、利用者はおおよそ240人にいました。それで、亡くなった方がだいたい60人、施設に入った方が約60人、息子さんなど家族に引きとられて県外、町外に出た方が60人、在宅に残っていた方が60人、おおよそ4分の1ずつ。残った60人は被災はしていないけど、ライフラインは

止まっているし、寝たきりの人もいるし、被災したのと同じくらい不便な生活だった。

1週間ほど経ってからかな・ガソリンがもらえて、職員が2人1組でみんなで回って家にいる人など在宅のニーズ調査をした。お風呂に入れないとか、寝たきりでおむつ交換できないとか、というニーズが出た。最初に動いたのはヘルパーかな、おむつ交換とか。お風呂に入れないというので、水が出るようになってから、「個浴」を始めた。このぐらいの災害になれば被災した人だけではなく、残された在宅の方たちも被災者と同じくらい大変な思いをしている、と思った。

最初は安否確認など一所懸命やっていたが、それはそれとして、在宅の人たちも不便のないようにしてあげなければならないと思った。

■さん、それは居宅介護、ケアマネの対応だね。

■この頃は皆「デイサービス」に集まっていたので、全部一緒だった。

■安否確認に歩き始めたのは「デイサービス」に移ってから。本当であれば、もっと早い段階で安否確認に歩かなければいけなかったのではないかという思いがある。

■実態を見れば歩けなかったのでは。

■実態は、そのとおり車もないし他に移動手段もなかったからだけ。

■それは、震災から10日ぐらい経ってからなの？

■「デイサービス」に移ってから。

■ケアマネは、どういうわけか名簿を持っていた。

■私は、後から利用者の安否確認に歩かなければならないから、避難するときに名簿を持って行くように、と言った。

■利用者の名簿を持っていたが、他の事業所と違って担当ケアマネでなければ利用者の自宅がわからない。ただ、ケアマネは皆無事だったからよかった。担当でないことが課題。

■データはいつでも、事務所が流されても、何かどこかに必ず残しておかなければならないとつくづく感じた。

■（「デイサービス」に）■さんも一緒だし、■さんも当然一緒にいたということですね。

■皆が何でもできるように兼務の辞令が出されて、その中でシフトを組んで今日（移動）入浴に行く人、今日デイを担当する人、訪問する人、と、とにかく皆が忙しく動き回っていた。

■施設の事業所のニーズ調査は共通の認識があったので、意思統一はなっていた。ニーズ調査は何日ぐらいでやったのですか？

■結構かかったと思う。19日から歩き始めて、歩く中で「ヘルパーの希望があるんだけど」ということから、まずは3月いっぱい安否確認とニーズ調査等をした。調査に回った人と、避難者をお世話する人とに分かれた。

■安否確認に歩いたのはほとんど■さん達。たまたま、ケアマネジャーが長井地区方面に向かうとき一緒に行った。その時に、「仕事に戻らなければならないので、また、ヘルパーをお願いできないか」と言う息子さんがいて、その人がきっかけで、4月の4日からサービス再開だったんだよね。

■このぐらいの災害があった時、ドタバタしていて、まず、亡くなった人たちのことが頭にあり、先だったけど。

被災しない地区の利用者を優先したほうがよかったかも知れない。停電になってエアマットが使えず、床ずれがひどくなったということもあった。

■ みんなが安否確認に行った後蛇口さんと一緒に食糧確保に歩いた。

■ ガソリンもないし、入浴車で運んだ。

《災害ボランティアセンターを振り返る》

(災害ボラセンの立ち上げ)

■ 次に災害ボランティアセンターを振り返るということで、初めての経験であったが、災害ボランティアセンターの立ち上げについて、準備から立ち上げまでの経過について■ 会長と■ 課長からお話を伺いたいと思います。

■ ボランティア関係では、高知の■さんと新潟県社協の■さんの2人が20日に来た。支援P※5の仕組み、内容などの説明を受けた。彼らは、県社協の紹介状を持ってきた。紹介状と通行証を持ってきた。どこで発行になったかは分からないが、車両に搭載するものようだった。

■ 高速道を通ってくるため、東京で発行されたのではないか・・・。

■ 説明を受けたが、私らも大槌町の状況を把握していないから、まず町内の状況を見てほしい、と言い、状況を見てもらった。その後、22日に来て、だいたいの町内の情勢を聴いた。社協の活動拠点がないので、探しに行くと言われたが、拠点になるところがなかった。あるとすれば、私が避難していた大槌高校の空いている教室くらいしか余裕がないのではないか。支援Pと社協職員は、大槌高校に行って教室が空いていることを確認したが、向かいの同窓会館「紫友館」が使われていないようなので何とかならないだろうかということで、自分も一緒に行って学校長にお願いしたところ、その場で借りることが決まった。ただし、使用は日中だけとなった。

紫友館を拠点とすることを決めたが、前日、「デイサービス」を訪ねてきたある団体からボランティアセンターを立ち上げたいとの申し出を受けた。今、当方でも支援Pの指導を受けながらボランティアセンターを立ち上げようとして準備をしており、一緒に活動するのであればよいと言ったが、その時は、後で来ると言い戻っていった。

そうしているうちに、彼らが中央公民館に災害ボランティアセンターを立ち上げたことから、24日に、支援Pと私とで既にテントを設営していた団体のところに向いて5人で話し合った。いずれ社協がボランティアセンターを設置、活動を進めていくことから、社協と一緒に活動をするようになった。

26日には、■氏を伴って正式に副町長を訪ねて行った。社協では、昨日ボランティアセンターを立ち上げ、今日から活動する予定であることを説明した。副町長は、よいことであり、ぜひ進めてほしい、ということであった。もちろん、町は行政組織が回復していないし、関わるのが難しい状況なので、社協に任せるということである。関係者が皆集まり、実際の活動は27日か・・・29日か？

いろいろ取り決めなどもあって、支援Pとの話し合いでは、ボランティア活動は、長期に渡ることになるから、リーダーを大槌社協として、支援Pなど派遣の職員が支える体制をとるのがよいということになった。その後、支援のため名古屋市社協をはじめブロックの職員など支援団体が加わってきた・・・25日に大槌に入った。

■ 立ち上げたのが3月25日？

25 日に来るから、25 日までに態勢をとるように、ということだった。それで、25 日に中央公民館にセンターを立ち上げた。

27 日から災害ボランティアの受け入れと、特例緊急小口資金の貸付が始まった。

立ち上げと活動開始が、少し違うのですよね。立ち上げてから、何日か経って活動開始。

いずれ、長期戦になるわけだから、ね。立ち上げまでの経過をお話いただきました。

(住民のニーズ把握)

次に、住民を対象としたニーズ把握について、要援護者へのニーズ調査などについて さんからお願いします。

4 月 18 日から私と さん（居宅介護支援事業所ケアマネジャー）がニーズ調査班に異動になった。その前までは、支援 P や応援職員などが町内の避難所や在宅を訪問して、ベースを作ってくれていました。住民とのコミュニケーションとか地理的な問題で、やっぱり地元の職員がニーズ調査に歩かなければ、ということで、さんと私が異動してきた経緯がありました。

そのとき避難所は 34 カ所ほどあり、週 1 回は必ず訪問して避難所の代表者に避難者のニーズと何で困っているかを調査して歩きました。在宅の避難者は、住宅地図を見て、しらみつぶしに歩きました。町内を山奥からすべて。在宅に避難している方が結構いました。介護が必要な方、空き家を借りて住んでいる、いわゆる「みなし仮設」の方、親戚宅に身を寄せている方などでした。在宅は 2 巡はしました。それらを基に定期的な見守り、支援が必要な方を抽出する作業をしまして、その解決策、方法として、介護だったり健康面であったり専門的な支援が必要なところは行政のほうに随時つなぎました。日常生活全般にかかるものについてはボランティアセンターに情報を提供しました。ボランティアの要請で多かったのは、理・美容、炊き出しなどでした。行政につないだけれど結果がなかなか分からないということも多かったので、さらに、週 1 回情報をまとめてやり取りしました。

課題として感じたことは、支援に入ってくれる方々が一週間とか二週間交代で入ってくれたんですけど、こちらの状況はもちろん分からない、大槌町というところも実際分からない、という中で私たちがきちんと先頭に立ってうまく指示を出せなかったのではないかと、ということが反省点としてあります。

さんと が支援に入ってきた人たちになかなかうまく指示が出せなかった、ということですね。

あと、役場でも避難所のニーズ把握をしていたが、その辺で、バッティングがあったり、意思疎通はうまくいっていたのか？役場は役場で歩いていた。

正直言うと、そこがうまくできてなかったのかなあ・・・と思います。

(ボランティアの受入調整)

次に進みます。避難所のボランティアコーディネート、サテライト業務について さんからお願いします。

避難所へのボランティア派遣は、ニーズ班から情報が来たり、避難所の代表者から出たニーズに対応しました。ニーズが一気に来ても、それに対応するボランティアが

その日すぐ来るというわけではなかったので、緊急に必要なあるところとか、あとは順繰りに万遍なく回るように調整をしてボランティアを派遣したかな、と思っています。

ただ、最初の頃は、今みたいに何回も連絡調整して来ていただくという態勢ではなくて、その日に、ボランティアが来るという連絡を受けただけで調整をしたので、その後がなかなかうまく行かなかった。実際、調整したボランティアも指定した避難所に行かなくて、炊き出しができなかったということもあった。そのことが、今のボランティア調整に活かされている、と思っています。

結構要望が多かったのは生活支援でした。炊き出しとか床屋、ずっと床にごろごろして体が痛くなったからマッサージをしてほしいという感じで、身体的な面で不調を訴える方が多かったので、それに対応するボランティアが重宝されたと思います。

最初の頃は、要望が聞けるのは避難所の代表の方たちだけだったので、避難所ばかりにボランティアの調整をしていた。在宅に避難された方たちへの支援がどうしても手薄になってしまったと感じています。

サテライト※6は、最初、浸水区域の大ヶ口と桜木町地区の2カ所に設置したのですが、ボランティアセンターを立ち上げていることの周知がすぐにできなかったので、チラシを作成し、それを一軒一軒配って、要望とか困ったことがあったら来てくださいと広報して回った。最初は、なかなか来なかったが、徐々に浸透して困ったことがあがってきた。土地柄なのか自分の困ったことはなかなか言わないけれど、誰かがやっているのを見て頼めばやってくれるんだな、と思ってもらえるようになり、相談に来る人も増えていった。

この震災で、ボランティアセンター、社協という名前が皆さんに周知されたので、よりよく活用されるきっかけになったと思う。

最初の頃は、周知の問題とか、ボランティアをどこにどう派遣してよいのか調整のほうもうまくいかなかったが、学んだことは多かったと思います。ボランティアって何なのか正直分からなかったので、支援してくれた派遣の職員さんにおんぶに抱っこでした。徐々に勉強して今に至っているのもっと知識を持っていればよかったと思う。

介護職員からボランティアセンター職員になったばかりで何もできず毎日恥ずかしい思いをしていた。

それも初めての経験だから・・・。どうにもならない部分はあった。私も議会事務局にいて、県内外の市町村の議員さんたちもボランティアに来たが、そのとき、何度か君に電話をし、活動先を紹介してもらい泥上げや家の中の掃除などをした。その頃は、堤防にいっぱい泥を入れた土のうや家具類が積まれてあった。

次に、運営支援、ボランティアの受け入れなどの調整について、課長お願いします。

最初に、ブロック派遣で社協の人達が来た時、支援Pもだけど、そもそも災害があるときに、そのブロックで、応援職員が来るという、そういうシステムになっていることを、その時初めて知って、「そういうものなんだ・・・」と。

結局、大槌社協は、これまで、例えば、阪神淡路があった、中越があった、いろん

1年経たない時・・・秋頃から。

拠点的にやる団体もあるんだよね。集中して、そして何でもやると・・・だけど、駄目になれば引き揚げる。一方、社協は一点集中というのはいできない。全地区が対象であり、そういうわけにはいかない。

言えば何でもやってくれるし、物（物資）もくれる。それがいつまでも続くのでは駄目だからその団体と話をしたけれど、なかなかそここのところが理解してもらえなかった。

泥だしでもなんでもやりますと返事をしていて、行かないし、やらないことが多かった。その苦情が、社協に来るんですよ。住民は、ボランティアというと全て社協だと見ているから。

区別がつかないんですね。

被災者から見れば、社協が嘘をついた形になる。約束したのに行かなかった。

課題がもう1つあります。半年から1年ぐらい経って応援職員が戻って行って、社協の各部署の事業が再開してきて、民生委員とか共同募金とか社協の職員も各事業所に戻っていく。そのような状況になってきたときに、災害ボランティアセンターには、災害直後ほどではなくてもまだまだボランティアが来る。そこで残った君がニーズ調整に苦労したと思う。どうすれば態勢が作れるか。

いずれ、災害があつて、時が経過してくれば、当然中身（内容）が変わってくる。中身に対応できる態勢にもっていきたいが、なかなかうまくいかなかった。態勢が追いつかない。

課題の3つ目は、お茶っこの会のデータやニーズ調査班のデータなど、いろいろなデータを取ったが、それを分析して課題を見出したり次の行動や事業展開につないでいくことができなかつたこと。

（行政・支援団体との連携）

次に、行政や支援団体との連携について、会長からは行政との連携、課長からは支援団体との連携についてお話しをお願いします。

行政については、割合うまくいったと思う。町の災害対策本部の会議に最初の頃から出席していた。朝と夕方の会議があつたが、夕方の会に参加して町の対策本部の動きも分かるようになっていて情報を共有していた。重要なことは、社協の朝会において伝えるなどしていた。全般に、対策本部の動きを把握できていたと思う。

その頃は、町のほか、警察、自衛隊、消防、消防団、県振興局、NTT、東北電力など。様々な情報が入ってきた、ということですね。

その点では、町の対策本部の動きは把握できていた。

団体との連携では、本当にいろんな団体が来て、初めて聞く団体も多く、いくつかの団体から派遣での応援もあつたが、正直、派遣期間が2、3日と短い場合はそのつど説明が必要で、受け入れる側も大変だった。せめて、1週間とか、2週間とかの期間だとよかつた。その間に状況も分かるし、向こうも（派遣で来る団体も）きちんと引き継ぎができるし。

今も継続して入っているのが「世界の医療団」※7とか「心がけチーム」※8です。「世界の医療団」は、元々、震災直後から避難所を回っているいろいろ心のケアとか相談とか

をやっていました。その年の11月頃関係団体が集まった時、健康推進班、地域包括支援センターとか集まったんですが、その中に、世界の医療団のスタッフが来ていて、現在、活動として行き詰っているところがある、という話から、そうであれば、生活支援相談員と連携をしてサロンをやって、こういう団体があつて、気軽に相談できる人がいるんだよ、ということを知ってもらおうようにしましょうということになり、今も継続しています。「心がけチーム」については、ニューヨークを中心とした在米日本人協会が寄付を集め、それを基にこちらで支援をしたい、という話がありました。

■ その後どうなったの？

■ NPOを作って、生活支援相談員と一緒に、週1回、同行訪問という形で活動しています。

■ いろいろな団体、NPOとかをどこかとりまとめる組織がほしいので大槌社協でやってくれないかと役場で話を持ってきましたが、断った。生活支援だけならよいとしても、例えば、雇用や産業開発、漁業支援などは社協の範囲を越えているので、行政が担うべきである、と話を返した。まとめきれないと思う、社協だけでは。

■ 社協がそれを取りまとめるのは、難しい。

■ 今までいろいろなボランティア団体とつながって、災害ボランティアセンターがあつて、その流れで話があつたと思う。何でもかんでもやるのではなく、社会福祉協議会がやるべきことを明確にし、どこかで線を引かなければならないと思う。

■ できるところとできないところとあるわけだから。

■ ボランティア団体についても様々連携していることがありますので……。最初の頃は、実績を上げるために単発で入ったところもあったが、3年以上経っても継続的に遠くから来てくれる人達も多くいる。ここに残って大槌町のためという方もいるし、真剣に大槌町のために支援してくれるボランティア団体や大槌町が気に入ったという方もいる。そういう人達の中には、これまでどおり連携して活動していきたいという方がたくさんいます。

■ 社協のボラセンがこれでなくなるわけでもないし、これからも何年も続いていくわけだからつながりは大事にしていかなければならない。

■ 息の長い応援をしてくれるというのはありがたい話だ。

【今後の災害への備えを考える】

《社協として何をすべきか》

■ 三点目の、今後の災害への備えを考える、に入っていきます。東日本大震災では誰も経験したことがないような未曾有の大災害に遭遇し、肉親や財産などすべてを失った町民もおりました。そのような過酷な状況の中で、日本中のいろいろな方々や世界中の人々から支援や協力をいただきまして、皆さん大変感謝しているわけですが、特にも、混乱時において冷静に行動した日本人の性質というか礼節、絆の結びつき等について私も印象深く記憶に残っているところです。

ここで、大災害を経験して今後の災害への備えを考えるときに社協として何が必要か、これから何をすべきかについて■係長からお願いします。

■ 社協として住民ニーズに応えることが必要だと思います。そのためには、社協の強みを生かすことだと思います。社協の強みは何かというと、地域を知っている、人を

知っていること。なぜ、地域、人を知っているかという、地道な活動をしているからだと思います。自治会との連携や介護の方では利用者とのつながり、いろいろな団体との連携、そのような地道な活動を今やっておけば、いざ災害になったときに住民ニーズも拾いやすいと思います。そして、住民ニーズに応えるために一番大事なのは行政との連携だと思います。

都会では行政のイメージは強くないが、田舎の場合は行政だと思います。いざ災害に遭ったときにどこに行くかといえば、田舎の場合は行政だと思う。普段から行政と連絡を取り合っ、役割分担を決めるなど、いざという時に話しやすい環境を作っておくことが大事だと思います。行政が対応して、住民ニーズに応えるために、ボランティアとか企業とかを行政や住民ニーズに橋渡しをするのがボランティアセンターや社協の役割だと思います。何が言いたいのかと申しますと、普段からの地道な活動が大事ということです。役場と社協の広報紙ではないが「おおちゃん」※9が行政とするならば、それを支える「こづちちゃん」※10が社協だと思います。役割をしっかりと果たしていきたいです。

行政は当然役割があるわけだし、社協は社協としての役割がある。棲み分け、連携を取っていかねばさまざまな困難が出てくる。整理していく必要がある。次、
さんから。

「ほっとおおつち」※11を柁内地区に、津波が来ないところに立派に建てていただいた。この間の大雨の時に、「城山」（中央公民館）を開放しますという災害のメールが入った。そのような時、「ほっとおおつち」は、今後災害時にどのような役割をしていくのか。泊まりの職員には、近くで災害などがあり住民が避難してきたときは受け入れてください、と言っているが、社協としてきちんとした決まり（行動指針）とかをまとめておく必要がある。

役場でも防災計画が出るが、福祉施設とか介護施設についても福祉避難所として方向づけしていくという話は出ている。多分、「ほっとおおつち」も災害時に福祉避難所として確保しておかなければならない。協定を結んでおくなど、今後出てくるだろう。

確かに避難所として指定になるだろう。今後そのような時が来た場合には、行政の担当と連携をとれるようにしておかないとうまくない。

社協として災害備蓄品も配備したが、井戸も欲しい。できれば、手押しポンプの井戸が欲しい。周辺の井戸の所在を確認したが近くにはないようだ。発電機とかストーブとかも配備になっているが、燃料が・・・発電機にガソリン、ストーブに灯油が必要、何日かすればもらえるとは思いますが。

社協としても物資の備えは必要だし、行政と連携して、避難所として指定されれば災害備蓄品の整備の話も出てくると思う。

決まるのであれば、職員にも周知して備えたいと思います。

ありがとうございます。次は、
さんからお願いします。

社協として何をすべきか、というと大きい話しに感じる。やはり普段から住民との触れ合いが必要だと思う。

住民と近い距離にいるというところを生かして対応できるように、ということだと思う。今話されてきたことが全てだと思う。避難所の話も出たが、「ワークフォロー」の赤浜の施設は町の避難所となっています。職員態勢もそうだし、施設の近くに住ん

でいる職員がいないので、緊急時に鍵の管理を誰もできない状況で、もし何かあれば私が鍵を開けなければならないという状況です。

次に、課長をお願いします。

君たちがニーズ班で歩いている時、大阪の方から来た方たちが大槌ってすごいですねー、訪問時に「社協です」って言えば、住民の方たちがほとんど社協を知っていて、社協さんが来てくれたんだって、皆言うんですよ、って。それは、当たり前のことだと思っていたんですけど、大阪とかの都会の人たちは、社協って言っても全然住民には知られていない、「社協って、何それ？」と言われる。それだけ大槌町の中では社協というネームバリューがあって、今回の震災で、ボランティアセンターの活動で、さらに住民の人たちからは社協という存在が理解されていると思います。

だけど、社協として何をしていたらよいか。災害があった時にはいち早く動ける、職員も同じ気持ちで住民の人だとか利用者の人たちに対応できる、そういう職員の意識が必要なんじゃないか、と思っています。自分の部署だけとか、自分達がここにいるからここだけのことをすればよい、ではなく、広く地域全体を見ていくという意識が職員皆の中に、平時から、必要だと思います。

そのための、何か研修会や勉強会だったり、交流だったり、お互い何をやっているのか、どうなのかを知るっていうことから始めないといけないと思います。

大事なことだと思います。お互い社協の職員でありながらどのような仕事をしているか分からない。他の事業所のことも覚えてもらいたいし、覚えてもらわなければならない。地方に来ればくるほど雇用の場にもなっているし、社協は知られているということはあると思う。人事異動もして、事業所間の交流が必要になってくると思う。

() 事務局長も言ったが、自分の担当する課以外の仕事は無関心になっている。社協の事業連絡会議を始めたのも他の事業所が何をやっているか理解してもらいたいという考えがあつたのことだった。自分が直接担当していなくても、訪問介護は、居宅は、ボランティアはどういう仕事だと、詳細はともかく概略だけでも頭に入れておいてほしい。大事なことだと思う。

次に、課長をお願いします。

皆さんおっしゃったことで、ある程度（話が）済んでしまったというところもあるけど、私としては少し別の側面から話をしたいと思います。

私は、当時、総務係長で、震災の年の4月1日から総務課長ということでやってきたわけなんですけれども、社協自体その法人の運営という部分になると、理事、評議員がいないと成り立たない、ということがありました。

避難している間に、理事は誰々だったかなあ、評議員は誰々だったかなあと、名前を書きだして、「確か、定数は何人だから、・・何人だ」。また、任期はいつだったかなあというのを書いていたことを思い出します。今回は、丁度、被災した時が任期の中間点というところで、会長も副会長も役員も在籍していたのですが、これが、任期が切れるところだと、恐らく、5月の時点で役員、評議員を選任するという会議をやるのはかなり難しかったんだと思います。県社協の総務と話をした時に、役員さん、評議員さんの任期はいつまでですか、とか、役員会、評議員会は開ける状態ですか、とか、決算はどうですか、予算はどうですかと必ず聞かれたので、私としては運営面の方まで気を回すのはかなりハードだなあと感じていました。現場の方に支援に入っ

てもらって有難かったんですけど、私は県社協の総務の方に電話で聞きながら支援を受けてここまでやってこられたという思いがありますので、総務的な運営の部分にも、少し支援の目を向けてもらえればかなり助かったと思います。

■ そのとおりだ。予算書も、決算書もない中での仕事だったし・・・。

■ でも、4月11日に臨時の理事会を開いただけでも大変よかったと思います。

■ 4月10日に、ここが（プレハブの事務所）できて翌日に理事会を開催したが、成立しなかったのさ、欠員が多くて・・・。

■ その時は、来れる方だけ来てもらって、今までの状況や今こういう活動をしなければならぬのだということだけでも分かってもらいたいという思いがありました。

■ そうしているうちに県社協からもらったんだよね・・・、資料を。

■ 毎年、県社協には決算書と予算書を提出していたので、県社協は前年度の決算書のコピーを持ってきてくれました。本来、新年度の予算は3月中、決算は5月中に理事会と評議員会で承認してもらうんですが、会議を開けるような状況じゃなかったです。県社協と相談して、23年度の予算は22年度と同額、22年度の決算はデータも資料もないので預金残高に合わせるしかないからということ、支援を受けつつなんとか作成して、7月には理事会、評議員会の開催にこぎつけて予算決算の承認をもらった、という形でした。理事の補充ができたのも7月の評議員会でした。評議員の補充は難しくそのままでしたけど・・・。

■ これはどうなんだろう、局長。県社協で例えば県内全部の（市町村社協の）資料が入る施設を作ってもらって、・・・施設というか、何か（の災害とか）、こっちで無くなった時に引っ張り出せるような・・・そういうものが出来ないものだろうか・・・

■ 役場では、「クラウド」というものを作って、他の自治体と協定を結んで費用は出し合うということで進めている。

■ 今度、それを県社協に提案してみようか。

■ よいと思います。今度の県社協の会長会議で提案できればなあと思います

■ 今回は沿岸（市町村社協）だけだったが、内陸だって何かあるか分からない。

■ 会長から、他にないですか。

■ 資料を確保することを社協として考えたいなあ、ということ。

■ 非常時のマニュアルの作成は当然のこととし、社協の中での全体としての避難訓練を年1回でもやっておかないと。各施設で消火訓練とかはやっているが、災害が起こったとき、誰がどのように動くのかという訓練はやっておいた方がよいと思います。

■ 備蓄品の賞味期限が切れそうなときに、住民を交えて炊き出しを兼ねて訓練をするというのもよいと思います。みんなで訓練しないと分からないと思う。

■ 例えばボラセン、直ぐに災害ボラセンを立ち上げるには、どうするかとか考えておく必要があります。

■ 施設のことも、住民にここは避難所になっているのだなど分かってもらえるよい機会だと思う。

■ 事業所ごとにはやっているんだけど、全体として必要だと思います。総務課で企画していきたいと思います。

【多くの支援への感謝の思い、伝えたいこと】

■ 最後になります。四つ目の多くの支援への感謝を伝えたいことに入ります。■ 課長からお願いします。最終章になります。よろしくお願いします。

■ 全国の皆様から寄せられた支援というのはありがたかった。それがなければ、3年経ってもまだまだですが、ここまで大槌町社協が復活してくるということはなかったと思う。本当に感謝の思いを伝えたいといっても、ありがとうございましたの一言でも足りないくらいなので、何と言ったらよいのか、今の状態だと分からない。ただ、今後のまちづくりにも、まだ何年もかかるかと思うんですけど、それまででも大槌町を忘れないでいてほしいというのがありますし、今でも続けていただいている支援もごございますので、それについてもありがたいなあという気持ちを持って、前向きに進んで行けたなら、と思います。

■ ありがとうございました。■ 課長からお願いします。

■ 私もまったく同じ思いです。社協はもうなくなるものだと思っていまして、存続できるかどうか、どうなんだろうって思っていた中で、いろいろな支援をいただいて、本当に感謝しかないんですけど、それは言葉でいくら言っても言い尽くせない。だからこそ、そういう支援をしていただいたことで、社協自体が震災前よりも地域のためにもっといい活動をして、前よりもよくなっている社協の姿を見せることが皆さんの支援への恩返しだと思っています。

■ ありがとうございます。最後に、■ 会長からお願いします。

■ ■ 課長、■ 課長と同じなんですけど、この災害で人のつながり、社協の人もそうなんですけど、人のつながりがこんなに強いということがいちばん感じたこと。自分たちは今まで誰にもやってこなかったわけだ。災害があっても、他人のことだという感覚できていたのだけれども、この災害で、本当にこんなにやってくれるのだというつながり・・社協関係だけのつながりというのではなく、一般の方たちもこんなに応援してくれているということを肝に銘じて社協を再建していきたいと思う。以上です。

■ 日本だけでなく世界中の方々からいろいろな支援を受けてきて、戸惑うところも多々ありましたが、この災害を通して多くの人々に支えられて生きているということを実感しましたし、本当にありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。

記憶が風化しないうちに、次世代を担う人たちが、二度とこのような惨事に遭わないように、正確な資料を後世に伝え残していくことが、私たち社協職員の務めだと考えております。

本日は長時間にわたり、課題検証座談会に協力いただきましてありがとうございました。

施設名などの説明

- ※ 1 小規模多機能型居宅介護事業所「ほっと大町」。社協事務所に隣接し、大槌町大町にあった。以下、「ほっと大町」と表記する。
- ※ 2 デイサービスセンター「はまぎく」。以下、「デイサービス」と表記する。
- ※ 3 障害者就労継続支援B型事業所「ワークフォローおおつち」。以下、「ワークフォロー」と表記する。（町内に2カ所あった。赤浜地区には所長、安渡地区には副所長がいた。）
- ※ 4 医療法人「あかね会」が運営する介護老人保健施設「ケアプラザおおつち」。以下、「ケアプラザ」と表記する。
- ※ 5 支援P：災害ボランティア活動支援プロジェクト会議の「通称」。
- ※ 6 ボランティアセンターの現地受付所として大ケロ地区及び桜木町の2ヶ所に「サテライト」を設置した。その後、沢山地区（4月）及び吉里吉里地区（5月）に1ヶ所ずつ増やしている。
- ※ 7 世界の医療団：本部はパリ。世界各地に医療・保健衛生分野の専門スタッフを派遣し、人道医療支援している国際NGO。日本人スタッフ（精神科医師・看護師等）が、震災直後から避難所、学校などを回り「心の相談」を行っていた。応急仮設住宅整備後は、社会福祉協議会生活支援相談員が開催するサロンに加わり、「眠りのコツ」「健康のツボ」などの講話やヨガ、ストレッチなどの運動指導に当たってきている。
- ※ 8 心がけチーム：NPO心の架け橋いわての「通称」。精神科医、臨床心理士、精神科看護師等で組織され、週末に「現地入り」。内、スタッフの一名が金曜日午後に生活支援相談員の訪問に同行している。
- ※ 9 おおちゃん：大槌町のイメージキャラクター。大槌のイニシャル「O」と、「槌」をモチーフとしている。
- ※ 10 こづちちゃん：NPO「ぐるっとおおつち」が「おおちゃん」のパートナーとして制作したキャラクター。「小槌地区」の地名に由来する。
- ※ 11 小規模多機能型居宅介護事業所「ほっと大町」が津波により流失したので、やや内陸部に位置する「柁内地区」に再建した。再建に当たり名称を公募し、「ほっとおおつち」に決まった。